HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	伝統景観と共生景観 : 平取アイヌ社会における「農村景観」の意味
Author(s)	瀬川, 拓郎
Citation	アイヌの伝統を基層にした多文化な景観 : 北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 16-17
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92878
Type	report part
File Information	ronshu_biratori (10).pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

伝統景観と共生景観

平取アイヌ社会における「農村景観」の意味

瀬川拓郎
札幌大学地域共創学群 教授

平取のアイヌ集落は日本の農村風景をおもわせる、とかつて指摘した研究者がいた。実際、近世の平取では農耕が生業に大きな比重を占めていた。

松浦武四郎によれば、幌去周辺は土壌がきわめて肥沃で、雑穀のアワ・ヒエ、根菜のダイコン・カブ・ジャガイモ、果菜のカボチャ・キュウリ・インゲンなどのほかタバコも栽培されおり、脇乙名の倉庫には毎年収穫される雑穀三〇俵が蓄えられていた。これらの作物が食料に占める比重はかなり大きかったはずであり、また栽培の管理もけっして片手間でできるものではなかっただろう。タバコは自給用を超えた商品作物だった可能性もある。

武四郎は、この地域は四方を見通すことができ、「蝦夷第一の開け場所」だったとしている。この「開け場所」の意味は、見渡すかぎり森林が開かれ、耕地が広がっていたということにちがいない。平取はたんに農村的というにとどまらず、「蝦夷第一」とも評される農村そのものの風景をみせていたのである。さらにその景観は、和人と同じように便所を設けていると武四郎が驚いたように、細部においても本州の農村と大きくかわらないものであった。

農耕は、北海道では古代の擦文時代からおこなわれており、コメをのぞく幅広い作物が栽培されていた。とくに内浦湾沿岸、日高、十勝など太平洋沿岸地域や石狩低地帯を中心に畠跡や炭化した雑穀類などがみつかっている。平取の農村景観は、このような農耕伝統のうえに成立したものであり、くわえて少ない積雪と温暖な気候、氾濫がおよびにくい比高差のある段丘面といった複数の自然要因が、この内陸に道内有数の農村景観を生みだしていたのだろう。広大な湿地の広がる下流域は、継続的な農業には不適な環境だったのである。

さらに、日高はすでに古墳時代から和人との交流が活発な地域であり、近世初頭には多くの和人の金掘りも入り込んでいた。このような歴史的条件も、本州的な農村景観のあり方に関わっていたに違いない。平取の農村景観は、古代から続く「伝統景観」であると同時に、和人との「共生景観」ということもできそうだ。

二風谷遺跡など平取の中世集落跡では、道に沿ってわずかな住居が散在し、住居の周囲に世帯ごとの耕地が設けられていたとみられる。しかし、このような住居と耕地がセットになった景観は、たとえば住居群が密集する古代の道東北などには想定しがたい。では、この特異な平取の農村景観は、地域の人びとに独自の文化や世界観をもたらすことにならなかったか。そのことについても考えてみる意義はありそうだ。

写真　ニオイチャシと農村風景